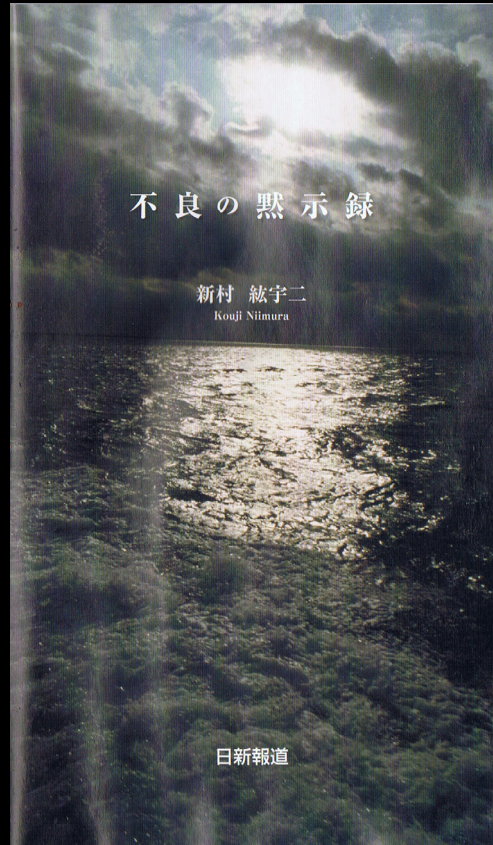


# 不良の黙示録

所感 日新報道 遠藤留治



『不良の黙示録』（新村紘宇二・著／新書判・140 ページ・本文 2 色刷・税込 980 円）

この本は本にして本にあらず一何もかもがユニークで型破り。

なぜか。今回はその話をしましょう。

この本の著者である新村さんは、現代では稀にみる「大和ごころ」をもった、男の中の男です。強きを挫き弱きを扶ける—そんな侠客の心意気そのままに生きんとし、これまで様々なトラブルと体験をしてきました。

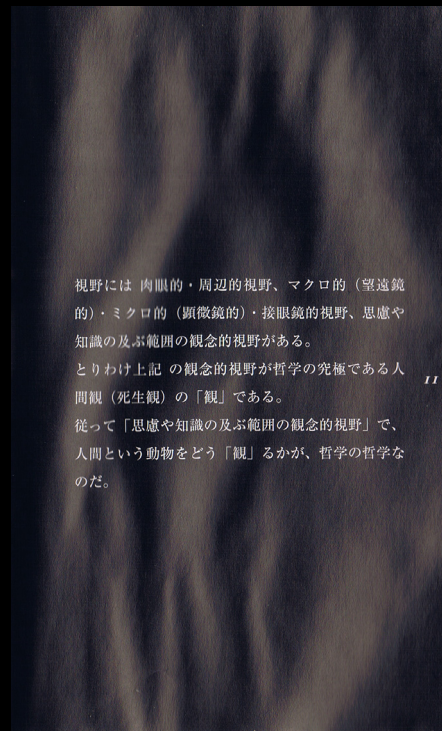
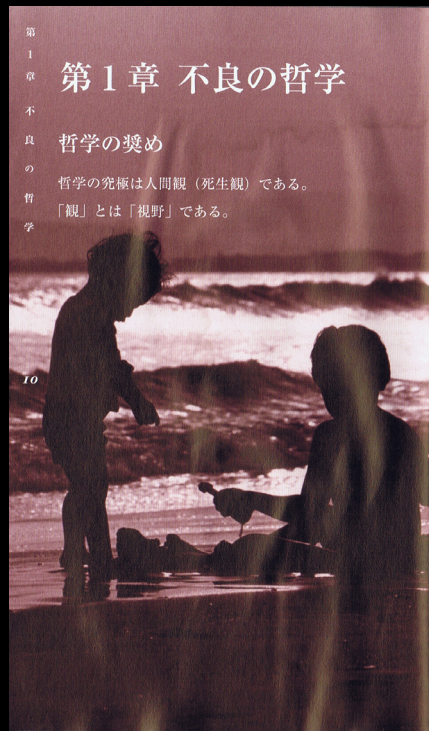
あるときは「不良」の意地を押し通し不覚にも司法のやっかいになったり、挫折しては仏門に入り僧侶となるや「慈悲」の世界を説く。

究極の体験から得られた人の言ほど、人の心を打つものはないと言いますが、新村さんの一語一語に、私は本当の悪と戦う真実の響きを感じました。

あるとき、新村さんが徒然に己が心の真実の叫びを書き留めているノートがある、と言うので、私はそれを見せてもらいました。そこには、人間の偽善と社会の矛盾、不条理に対する怒りに燃える数行の言葉がありました。

これだ！。

真実を問うのに多くの言葉は要らない。「寸鉄人を刺す」とはまさにこのことだと思い、私は出版をおすすめしました。



そうしてできあがったのが、この本『不良の黙示録』です。  
 第一章「不良の哲学」、第二章「不良の美学」で構成されています。全文2色刷り（口絵8ページは4色刷り）で、各ページの背景カラー写真は抒情をもった、いわば男の不良哲学という散文詩とも言えるものにもなっており、読者の心を揺さぶらずにはおかないでしょう。そこに、生命を賭けて生きてきた一人の人間の、人生のいぶし銀のような輝きが見えるからです。

私も久しぶりに編集しながら興奮しました。是非、まず手に取って「見て」ください。「読む」のはそれからが良いです。



愛とは熱い敬意であり

憎とは冷たい敵意である